

卷頭言——木簡学会の十年——

『木簡研究』は本号をもつて十号を迎える。一九七九年十二月一日、二日の木簡学会第一回大会で刷上りのインキの香も新しい創刊号を手にしてから、はや十年の歳月が経ったわけである。

十年一昔というが、まことにこの木簡学会十年の歩みは、私には長いようで短い一瞬の間の出来事だったようでもあるし、なおまさめやらぬ夢の中にあるようにも思える。とくに、第一回大会に先立って開かれた七九年三月三十一日の設立準備総会で、会の性格や構成をめぐって激論が交された折、若氣の至りで推薦制や高額会費のコンセプトについて強気の発言をしたことが、坪井清足・前奈良国立文化財研究所長の耳目とまり、はからずも委員に推薦されるというハプニングにつながったことは、つい昨日のことのようである。

以来十年、会は着実に基盤を固め、会則第三条に定める、木簡に関する情報の蒐集と整理および研究・保存の推進と、成果の普及および活用という所期の目的はおおむね達成されつつあるように思われる。その具体的成果は毎号の会誌に示されていが、なかでもその年度ごとの新出木簡の報告は、九号編集子のいうように、改善を積み重ねて安定したスタイルを完成し、コロタイプの口絵図版と相俟つて、本誌のゆるがぬ特徴を創造したといってよい。この間、直接編集を担当された委員・幹事の労苦に、この場を借りて心から敬意と感謝の念を表明したいと思う。

この十年を回顧して、何といっても痛痕事は、前会長岸俊男先生の逝去である。先生もし存命ならば、この時を迎えてどのような感慨を持たれるであろうかということが、私の念頭を去らない。先生は、本誌「創刊の辞」の中で、木簡出現の意義を

「文献史料の上で限界にきていた日本の古代史研究を蘇えらせ、未来に向かって無限の可能性を示すに至った」と高らかに宣言し、さらにこの貴重な木簡が地下から廃棄されたままの状態で出土するというわが国の特性に注目して、木簡の史料としての活用は「木簡の正確な釈読ばかりではなく、何よりも木簡の出土状況や伴出木簡についての精確・的確な観察・記録が必要であり、そうしたものの有無が木簡の史料としての死命を制する」と断言し、発掘担当者との緊密な連携を強調した。この指針が本誌の新出木簡報文のスタイルに貫徹していることは言うまでもない。

先生はまた、木簡の史料的価値を高めるためには「単にそこに書かれた文字ばかりではなく、その形状・材質など物に即した精密な考察が不可欠であり、そのためには永久保存が要求されてくる」として、木簡の形質的研究と、保存科学との連携とを強調している。木簡の形質や機能に関する研究は、その後も先生が折にふれて強調された課題であったが、この十年、木簡史料の華かな利用に比べるとこの方面的研究は未だしの感が深い。それがさらに木簡の保存問題となると、事態は一層深刻で、私の体験でも、木簡表面の黒色化や黒斑の出現、墨字の退色などが急速に進行している。こうした事態に対応するためには、まず木簡の重要文化財指定等を先行させ、その上で抜本的保存対策を講ずることが緊急に必要となってきたといわねばならない。

木簡学会第十回大会は、三万点にものぼると見込まれる長屋王家木簡出土ニュースの興奮がさめやらぬ中で開かれる。平城宮木簡三十年の総量に匹敵するこの木簡の出現は、これまでほとんど未知であつた貴族生活の内面を語る第一級史料として、おそらく木簡研究史をぬりかえる革命的意義を有するものとなろう。それだけに、これから十年は、日本の木簡学にとっても、またわれわれ木簡学会にとっても、文字通りの正念場となるのであるまい。

(原秀三郎)